

平成 30 年 6 月 13 日現在

機関番号：16301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K16888

研究課題名(和文) 中小規模畜産産地の革新と存続の可能性に関する研究

研究課題名(英文) A geographical study of small and medium-sized stock farming production areas from the point of their innovation and sustainability

研究代表者

淡野 寧彦 (TANNO, yasuhiko)

愛媛大学・社会共創学部・准教授

研究者番号：10591951

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：海外産地との競合や消費量の頭打ち、生産コストの増加などの課題に直面する日本の中小規模畜産産地が、どのような動きや仕組みを通じて革新・存続しうるのかについて検討した。生産面においては独自品種の導入や飼料用米の活用、耕畜連携の推進などが、販売・消費面においては消費者に対するわかりやすいメッセージの発信などが展開されていることが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：Small and medeium-sized stock farming areas in Japan face competition from overseas livestock products, slower growth of consumption and cost rise and so on. Now, these areas enforce innovating a new breed, utilizing fed rice, promoting collaboration between crop farming and stock farming and delivering a clear message to consumers for their innovation and sustainability.

研究分野：人文地理学

キーワード：畜産業 中小規模産地 ブランド化 飼料用米 耕畜連携 テキスト分析

1. 研究開始当初の背景

近年の日本農業は、安価な輸入食料の増大や農業従事者の減少・高齢化といった課題に直面し、国内の産業生産額全体に占める割合も低下傾向が続いている。今後もさらに、海外の多数の農産物産地との競合が激しくなることが予想される。他方、食料消費の傾向は、すでに1980年代には「飽食の時代」と呼ばれるほどに量的拡大が停滞し、その後は低価格、喫食の手軽さ、健康志向、さらには食の「安全・安心」などが求められるようになった。こうした消費者からの多様な要求には、食料生産の分野だけでなく、流通・消費等の分野での対応も必要であり、研究を行う上でも食料供給体制の一連の流れや結びつきを視野に入れた手法が重要である。

日本の畜産物供給に関する既存研究は、地理学や農業経済学などの分野によって蓄積されてきたが、その多くは主に九州・関東・東北・北海道地方などにおける大規模畜産産地に関するものであった。地理学研究での一例を挙げれば、鶏肉や豚肉の系列化(インテグレーション)によって生産拡大が進んだ地域的特徴(長坂 1993;1998;1999)や、輸入畜産物の急増と産地内部での生産性低下という2つの問題に対し、商社や地域の食肉加工場などが鶏肉供給体制の再編成を行った状況(後藤 2001;2003)に関するものがある。申請者もまた、黒豚等を活用した銘柄豚事業によって豚肉のブランド化が進められ、豚肉価格の維持や流通企業・消費者らとの新たな連携構築などによって産地の存続が図られていることを示した(淡野 2007;2009a,b;2010;2014a,d)。一方で、中小規模畜産産地に関する研究は、個別の地域や事業に着目した研究は散見されるものの、体系的に産地の畜産経営や存続状況について分析した研究はほとんどみられない。先述のとおり、近い将来、日本の大多数の食料産地が海外産地との一層激しい競合にさらされる可能性は極めて高い。こうした中で、中小規模の産地では、海外産地との価格競争による優位性はほぼ皆無であり、何らかのかたちで商品の差別化が可能となる取り組みを、現在のうちから進める必要がある。こうした喫緊の課題に対して、研究分野からも速やかなアプローチが必要となる。

2. 研究の目的

本研究では、海外農産物産地との競合が今後一層激化することが予想される中で、また食料に対する消費者からの「安全・安心」が強く求められる中で、日本国内の中小規模畜産産地がいかに革新を遂げ、存続しうるのかを、主に四国地方を対象地域として分析することを目的とする。研究では特色ある豚肉および牛肉の事業展開や供給体制について現地調査をもとに明らかにし、これらを起点に産地が革新・存続を遂げる具体的な方向性として、異業種連携、地域資源の再評価、

消費者との関係性強化の3つに注目する。

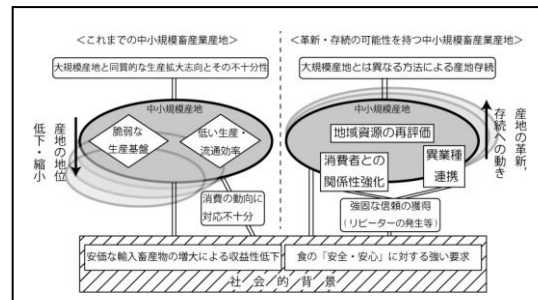


図1 中小規模畜産物産地の課題と今後の革新・存続可能性の概念(筆者原図)

3. 研究の方法

主に四国地方における現地調査を行い、当該産地や畜産業の革新・存続に結びつく活動や手法、現象等の所在について検討する。また、日本の食肉需給に関する動向を文献解読から分析し、消費者における食肉の受容形態やイメージを明らかにするとともに、これと生産サイドの動向との関係性について分析する。上記をもとに、革新・存続の可能性を持つ中小規模畜産産地としての成立条件やその地域的特徴について考察し、研究全体の総括を行う。これらの分析を行う上で、研究目的でも示した、異業種連携、地域資源の再評価、消費者との関係性強化の3つを主要な視点とする。

4. 研究成果

高知県の中山間地域における豚肉のブランド化を目指した取り組みである「米豚」事業に関する調査では、特定地域における飼料用米を活用した畜産の成立可能性と消費者の受容状況について検討した。飼料用米の生産やその活用は、国策的な支援のもとで急拡大しているが、中山間地域においても、飼料用米生産は地域農業の存続に一定の効果をもたらすと同時に、この飼料用米を地域内の養豚業に活用することが可能であり、地域資源の再評価につながることを期待される。対象地域とした四万十町は、高知県有数の米どころであるものの、米の生産調整のための転作作物として大豆が主に栽培されていた。ところが連作障害の発生によって大豆生産は大打撃を受け、新たな作物を導入する必要性が発生した。この際に取り入れられたのが飼料用米生産であり、作付面積や農家数も増加した。この飼料用米を活用して生産された「四万十ポーク 米豚」も消費者から高く評価され、地域の養豚業を支える重要な柱になりつつある。こうした動きは、消費者が期待する食の安全・安心やトレーサビリティの実現、国産志向にも対応したものといえる。

地域に根差した肉料理や食文化を地域資源化し、活用するという点では、岡山県津山市のB級ご当地グルメである「津山ホルモンうどん」をめぐる地域振興のあり方が、その

具体的な手法の1つとして注目できる。津山市は、古くから牛馬の流通地として栄えた交通結節点であり、「養生食い」ともいわれる肉食文化の歴史も存在したこともあって、庶民の味としてホルモン食が定着した。津山ホルモンうどん研究会によるホルモンうどんマップの作成・配布やB-1グランプリをはじめとする様々なイベント出展によって、津山ホルモンうどんの知名度は急速に向上し、全国化した。ホルモンうどんを食べるために大勢の観光客が津山市を訪れるようになったほか、津山ホルモンうどんの認知によって津山市の名称や場所を認識する観光客の存在や、ホルモンうどんの喫食とともに津山市やその近隣の観光も目的とした観光客の増加もみられた。このように、地域の食と歴史との関係性を土台とした地域資源化を通じて、地域内外の多くの人々からホルモンうどんという肉料理が評価され、国産食材の活用等にも一定の効果をもたらさうる可能性が示唆された(図2)。

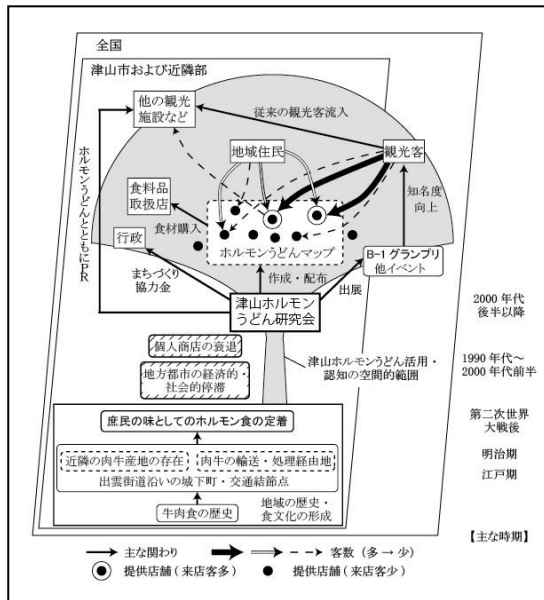


図2 津山ホルモンうどんの活用を通じた、地域の肉料理・食文化の地域資源化(淡野・赤松(2016)より引用)

また、食肉をめぐる様々な立場からの意識やイメージを検討するための一手法として、畜産学の研究者や実務者らとの検討を実施した。畜産の現場と消費者との間には、社会的・空間的な距離や乖離が存在しており、これらは容易には解消できず、消費者が畜産業についてイメージしたり理解したりするうえでの障壁になっていることが想定される(図3)。例えば社会的な隔たりとして、消費者は肉を見て食べるが元々の家畜の姿を見ることはなく、生産者も消費者も「同じもの」に接していても、その形態は大きく異なってしまう。また、農業技術が日々進化すると同時に非農業者が増加するなかでは、生産者と消費者との間に理解する技術や情報の差異が発生する。また空間的な隔たりとして、水

田は身近な場所に存在するが、家畜舎は多くの場合、身近にはなく訪れることもないため、畜産に関する明確な認識を抱きにくい。さらに近年では、家畜伝染病の流行への対応として防疫体制の強化が進み、家畜と間近に接するのは一層ごく一部の関係者のみとなった。大勢の消費者が居住する都市部と、多くの家畜が飼養される農村部という、存在・行動する空間の違いが、畜産業においてはとくに顕著である。そしてこれらのことから、畜産関係者にとっての当たり前は消費者にとってはそうではなく、あえて必要のない情報が消費者の商品選択上の判断材料になってしまう危険性が存在する。消費者が十分な認識を持ちがたい畜産業であるからこそ、ブランド化の方法や消費者への情報提示などのあり方には、慎重な対応が求められるのである。こうした課題については、今後、学際的な視点をさらに重視した検討が必要となろう。

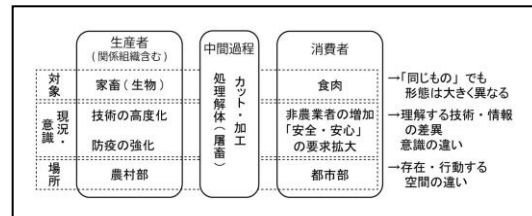


図3 畜産物の生産と消費における社会的・空間的乖離の概念(淡野(2016a)より引用)

全国的な畜産物の供給のなかで、近年ではブランド化の動きが急拡大していることをふまえ、消費者における食肉の受容形態やイメージを明らかにする分析も実施した。すなわち、豚肉供給における銘柄豚事業の拡大が継続していることを『銘柄豚肉ハンドブック』などから確認するとともに、その特徴の変化を分析することによって、生産・消費の両サイドにおける食肉に対する意識や評価基準などのあり方について、テキスト分析などをもとに検討した。この結果、生産者らが自らの豚肉をアピールする際の語句は、生産面の工夫から食味やイメージを重視した内容に変化していることが明らかになった

このほか、徳島県において新たな交配種として生産・飼育された阿波とん豚は、配合の特殊性や生産技術などに関する生産面でのアピールだけでなく、販売指定店や指定料理店の認定、トレーサビリティシステムの導入などを通じた、消費者が求める食の「安心・安全」を強く打ち出す方法などがみられた。また愛媛県大洲市においては、飼料用米生産が増加し、畜産業との連携強化が模索している動きがみられた。

以上のような研究を通じて、日本の畜産業産地においては、生産技術の更新や生産性向上を重視するのみならず、こうした生産面についてのアピールから、消費者が理解しやすい語句等を用いたアピールへと次第にシフトしていることが把握できた。これと同時に、

中小規模畜産業産地の革新や存続には、多様な課題が存在し、容易に解決しうるものでないことがあらためて把握された。他方で、これまでに結びつきのなかった異業種間の連携や異なる経営形態の生産者間の結びつき、消費者を意識した商品開発・アピールなどが、産地の将来を支える重要な要素として機能することが考えられた。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

- 1) 松岡 淳・間々田理彦・淡野寧彦(2017) : 中山間地域の水稲作経営における農地集積の実態と展望―「峡谷型中山間地域」を事例として―. 農林業問題研究, 53(3), 148-155. (査読有)
- 2) 包 翠榮・淡野寧彦・胡 柏(2016) : 北海道北見地域における酪農業の特徴と酪農発展途上地域への技術・経営形態の活用可能性. 地域創成研究年報, 11, 55-69. (査読無)
- 3) 淡野寧彦・赤松 翔(2016) : 岡山県津山市における「津山ホルモンうどん」の活用による地域活性化. 愛媛の地理, 24, 1-14. (査読有)
- 4) 淡野寧彦(2016a) : 北東北における飼料用米の活用による耕畜連携の進展とその意義―「日本のこめ豚」事業を事例に―. 地理空間, 9, 21-43. (査読有)
- 5) 淡野寧彦(2016b) : 地理学の視点からみたブランド畜産物の特徴と課題 ―銘柄豚を例に―. 関西畜産学会報, 173, 21-26. (査読無)
- 6) 淡野寧彦・野島芽衣(2015) : 愛媛県西条市の農産物直売所「周ちゃん広場」の存続要因. 人文学論叢, 17, 53-73. (査読無)

[学会発表] (計4件)

- 1) 淡野寧彦(2017) : 肉は「うまい」のか, 「あまい」のか ―銘柄豚事業にみられる差別化の特色と空間性の一考察―. 日本地理学会 2017 年春季学術大会 (筑波大学).
- 2) 松岡 淳・間々田理彦・淡野寧彦(2016) : 中山間地域水稲作における農地集積の実態と展望～四国の「峡谷型中山間地域」を事例として～. 第 66 回地域農林経済学会 (近畿大学).
- 3) 淡野寧彦(2016) : 銘柄豚事業の全国的拡大と飼料用米の活用. えひめ農業・農協問題研究会第 70 回例会 (JA 全農えひめ会館, 招待講演).
- 4) 淡野寧彦(2015) : 地理学の視点からみたブランド畜産物の特徴と課題 ―銘柄豚を例に―. 関西畜産学会 (愛媛大学樽味キャンパス, 招待講演).

[図書] (0件)

[産業財産権]

○出願状況 (0件)

名称 :  
発明者 :  
権利者 :  
種類 :  
番号 :  
出願年月日 :  
国内外の別 :

○取得状況 (計0件)

名称 :  
発明者 :  
権利者 :  
種類 :  
番号 :  
取得年月日 :  
国内外の別 :

[その他]

- (1) 淡野寧彦-研究者-researchmap のウェブページ  
<https://researchmap.jp/read0139951/>
- (2) 淡野寧彦の活動状況報告ウェブページ  
<https://blog.goo.ne.jp/tanno-yasuhiko>

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

淡野 寧彦 (TANNO, Yasuhiko)  
愛媛大学・社会共創学部・准教授  
研究者番号 : 10591951

(2) 研究分担者

( )

研究者番号 :

(3) 連携研究者

( )

研究者番号 :

(4) 研究協力者

( )